

# 蒙古襲来に関わる教科書記述についての一考察

石井 智子

## A Study of Descriptions of the Mongol Invasions in School Textbooks

Tomoko ISHII

(Received on Jan. 31, 2024)

### Abstract

Sannomaru Shozokan (the Museum of the Imperial Collections), which had collections of precious works of art related to the Imperial Family, was partly rebuilt and opened as Kokyo Sannomaru Shozokan (the Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan) in November 3, 2023. It houses Moko Shurai Ekotoba (picture scrolls of the Mongol invasion attempts against Japan), whose well-known picture is in social studies textbooks for primary and secondary schools. Hideo Hattori (an honorary professor at Kyushu University) has recently published two books on the Mongol Invasions. He forces us to reconsider the theme in question and drives us to abandon the common view that the divine wind blew and to rethink war and peace. The present writer considers Professor Hattori's deep concerns by looking at what is written not only in textbooks used in primary and secondary schools but in books in general.

キーワード：皇居三の丸尚蔵館，蒙古襲来，神風思想，服部英雄，教科書記述

### はじめに

2023年11月3日、皇室ゆかりの貴重な美術品などを所蔵する三の丸尚蔵館の建て替えが一部完成し、「皇居三の丸尚蔵館」として新装開館した。ここには小学生から高校生まで社会科の教科書でお馴染みの「蒙古襲来絵詞」が収蔵されている。

一方、歴史学者・服部英雄氏は『蒙古襲来』（山川出版社、2014年）、『蒙古襲来と神風-中世の対外戦争の真実-』（中央公論新社、2017年）と矢継ぎ早に刊行、蒙古襲来の見直しを強力に推進、いわゆる「通説」を退け、そこから「戦争と平和」について改めて考えようとする。

筆者は、まず小学校・中学校・高等学校の教科書から一般向け図書における蒙古襲来について服部氏から学び直したいと考え、本稿ではまずその序論として著述するものである。

### 1. マスコミの論調

2023年11月26日付「朝日新聞」は、「皇室から国に寄贈された美術品や工芸品など約6100件、2万点を収蔵する

『皇居三の丸尚蔵館』（東京都千代田区）が、管理運営を宮内庁から文化庁所管の独立行政法人に移し、今月、一部が新装開館した」ことを伝えている。

その際の記事には、図版として3点、その先頭に「皇居三の丸尚蔵館収蔵の国宝『蒙古襲来絵』後巻（部分）」がカラーで掲げられている。

上記の報道の前に、「毎日新聞」11月5日付「余録」欄は「鎌倉時代、元が日本に侵攻した元寇の様子を伝える『蒙古襲来絵詞』は、歴史教科書でもおなじみの絵巻物だ。御家人、竹崎季長が自らの武功を描かせたとされる▲所蔵する皇居三の丸尚蔵館で、一部が公開されている。同館が宮内庁から国立文化財機構に移管されて初の特別展で、見どころのひとつだ」と報じている。

この一文に続けて、「余録」は「元寇を巡っては、長崎県松浦市・鷹島沖の海底で最近元寇船らしき木材が見つかった」と述べる。この指摘については、「毎日新聞」10月24日付が「元寇 3隻目の沈没船か 長崎・鷹島沖で発掘」の見出しのもとで報じている。

さらに「余録」は「服部英雄・九州大学名誉教授は著作『蒙古襲来と神風』（中公新書）で、最初の文永の役（1274年）について、嵐のため元が一夜で撤退した記録はないと指摘する。弘安の役（81年）大型台風とみられる悪天候が元軍に大きな打撃を与えたが、その後も戦闘は続いたと検証した」、そして「戦前の『神風が日本を救う』という、いわゆる『神風史観』を生むことになった学説に関し、同書は『多くの人が信じてきた蒙古襲来像は虚像、偶像なのだ』と論じる」ことに焦点をあてて紹介している。

## 2. 問題の所在

前節を踏まえて蒙古襲来の問題点をあげていくと、まずは『蒙古襲来絵詞』（以下、本稿においては『絵詞』と略称する）が宮内庁から国立文化財機構に移管された意義が考えられる。これについては、野口周一氏が「＜研究ノート＞フリーア及びサックラー美術館訪問記—『蒙古襲来絵詞』参観を中心に—」（『新島学園女子短期大学紀要』第19号、2000年）において、従来の研究史を要領よくまとめている。

野口氏はこの稿を起すに際し、学生のアメリカ短期留学（1998年2月9日～3月13日）を引率するにあたり、スミソニアン博物館群の一角にあるフリーア美術館が日本の宮内庁、文化庁などと共催する『皇室名宝展』（会期：1997年12月14日～98年3月8日、会場：アーサー・M・サックラー美術館）を学生と参観する機会にたまたま恵まれ、そこに『蒙古襲来絵詞』が出展されていたことによると述べている。その前提には「見たくともおいそれとは見られない美術品の存在、その筆頭にあるのが、歴代の天皇家に伝わる美術品」、すなわち皇室コレクションだという認識の存在があったとする。

そして、荻野七三彦氏（早稲田大学名誉教授）の回顧を「本絵詞が御物であることは、研究に規制を与えてきている」、「本絵詞の研究は、やはり御物原本をほかにしてありえないが、私には今もってかかる恩恵は施されていない」と引用した<sup>1)</sup>。

さらに野口氏は、荻野氏の研究を「時流との関連」でも読み解き、さらに石井進氏（東京大学名誉教授）による荻野氏説の進展・深化を、石井氏はその該博な鎌倉時代史の知見をもとに示すもの<sup>2)</sup>、筆者は遺憾ながら本稿では割愛する。

次に問題となる点として、服部英雄氏が前掲書において「多くの人が信じてきた蒙古襲来像は虚像、偶像なのだ」と論じて、二事例を示された。すなわち、文永の役において元軍は一夜で撤退する、一方で弘安の役も大型台風とみられる悪天候が元軍に大きな打撃を与えたが、その後も戦闘は続いた、——この2点である。

この服部氏が提示する問題点に関連することについても、野口氏は別の視点から従来の研究史を整理されている。その論考は「元寇！キミならどうする？—歴史教科書における『元寇』叙述をめぐって—」（『比較文化学の地平を拓く』所収、日本比較文化学会関東支部、2014年）であり<sup>3)</sup>、この論考は氏の旧稿2編「東アジア世界のなかの蒙古襲来」（『総合歴史教育』第37号、総合歴史教育研究会、2001年）、「明治期以降歴史教科書における蒙古襲来小考」（『共愛学園前橋国際大学論集』第2号、前橋国際大学、2002年）を基底にすえたものである。

野口氏は蒙古襲来の問題点を、最新の研究成果が盛り込まれている概説をもとに、①「蒙古の国書」、②「蒙古軍の戦術」、③「文永の役とその顛末」、④「文永の役後の幕府の対応策」、⑤「弘安の役とその顛末」、⑥

「第3次日本遠征」、⑦「その他の特記事項」、⑧「蒙古襲来の影響」、——8点から従来の諸説をまとめたのであった。

これらの諸点について、野口氏は次のように纏める<sup>4)</sup>。順次、引用していく。「蒙古の国書」について、その書面は従来から言われているように、無礼あるいは傲慢なものなのだろうか。概して、東洋史学者は穏やかなものと理解し、日本史学者は威嚇的と理解している。「蒙古軍の戦術」については、その火器や集団戦法に日本軍が戸惑ったことは人口に膾炙している。「文永の役の顛末」について、従来から大風雨によって蒙古軍は退却したと考えられている。その後、「文永の役後の対応策」については、異国征伐を始めとして石築地の構築や異国警固番役の課役が知られている。「弘安の役の顛末」については、このときもまた大風雨が起って、大部分の蒙古軍は海の藻屑となり、残余のものは日本軍によって掃討されたとする。「第3次日本遠征」は計画されたものの実施されなかった。その理由として、「アジアの連帯」とか「アジアの連動」という言葉で主張されたりもしている。以上である。

### 3. 服部英雄氏説の紹介

服部氏には「余録」で紹介された『蒙古襲来と神風』の前に、『蒙古襲来』（山川出版社、2014年）という560ページにもものぼる大著がある。この二冊を合わせて紹介する必要があるのだが、筆者には書評する時間を現在は持ち合わせていないので、本稿では、氏の執筆の意図の紹介にとどまることをお断りしておきたい。

服部氏は『蒙古襲来』の冒頭に「ガイダンス・蒙古襲来」を設け、「蒙古襲来に関わる史料は日本・高麗（のち朝鮮）・蒙古（元）・一部宋におよんで多数がある。これまでの研究は史料の文言や絵画の意味を深く、正確に、行間・紙背を含めて、読み取ろうとしてこなかった。本書は史料を徹底的に読み直すことによって、従来の解釈の誤りを正し、両度の戦争の実像をさぐる。蒙古合戦は神風による戦いではない」（3ページ）と書き出される。筆者はこの最後の「蒙古合戦は神風による戦いではない」という記述に注目する。

そして『蒙古襲来と神風』の「はじめに」は、「太平洋戦争が終わるまでは、大人も子どもも『神風』を信じていた。嵐による蒙古襲来（元寇）での勝利である。無謀な戦争を、無批判に国民が支持しつづけた背景の一つに、この不敗神話があった。戦争最優先の全体主義国家はあらゆる批判を許さなかったとはいえ、国民も戦争を終わらせようとは考えず、努力も行動もしなかった」と書き出され、「神風史観によって、蒙古襲来は以下のように解釈された」として「神風によって、蒙古が退散した。つまり二度ともに神風が吹いて、元寇は決着がつく。文永の役では敵は一日で引き返し、弘安の役では嵐によって、肥前鷹島に集結していた敵船が沈み、全滅した」（i～iiページ）と記された。これは前々節の「余録」において紹介された通りである。

まず服部氏が問題視される文永の役について、『蒙古襲来』の第二章「文永十一年・冬の戦い」の第一節は「不自然にすぎる通説—翌朝姿を消した蒙古軍？」と題され問題点が一目瞭然となっている。氏は「教科書の記述に、『文永の役は一日で終わった』とするものがある。『博多合戦の翌朝にはその姿を消していた』—よく知られた記述である。教科書ばかりではない。蒙古襲来をテーマにした研究者が執筆する一般向け図書は、この一〇年間でもかなりの数が出ている。海津一朗、寛雅博、近藤成一、佐伯弘次、新井孝重、小林一岳、湯浅治久ほか。どの本も蒙古襲来の戦闘経緯に関する記述は似たり寄ったりで、異口同音に『翌朝に帰った』『一日で姿が消えていた』とする。それを否定しようとする記述、疑問を持った分析はどこにも、だれにもなかった」と詳細に説明する（95～96ページ）。

ここでは、一般向け図書のうち、まず佐伯弘次氏のをあげておくことにする。佐伯氏は「元軍、博多湾に襲来」という節を立て、「十月二十日、元軍は船から下り、馬に乗り、旗をあげて日本軍に攻めかかった」という記述から始め、その後の戦闘経過を詳細に説明、次節「元軍、撤退する」において「翌十月二十一日の朝、日本軍が海の方、つまり水城から博多方面を見渡したところ、元の船は皆いなくなっていた。わずかに一艘の元船が博多湾口の志賀島に残っていたが、その船の兵士の多くは日本軍のために生け捕られ、水城の前で首を斬られたという。（後略）」と述べたのであった（佐伯弘次著『モンゴルの襲来』＜『日本の中世』第9巻＞中央公論新社、2003年、94～99ページ）。

次に一般向け図書の代表例として、岡本顕實著『世界帝国が攻めてきた 元寇 一国難。神風は吹いたか?』

(さわらび社、刊行年不明)をあげてみたい。これは全13ページのものであるが、図版は全てカラーであり、<郷土歴史シリーズ No.4>と銘打たれている。その「博多が一夜にして灰燼に…一文永の役」の章では「元軍は一夜で撤退、『予定の作戦』と」という一節があり、「14万の大軍が必勝を期して来襲—弘安の役」の章では「超大型台風。元船、転覆し全滅」という節が立てられている。しかも本書の刊行年が記されていない。これでは服部氏の懸念も高まることであろう。

#### 4. 昨今の教科書記述から

服部英雄氏は「文永の役では敵は一日で引き返し、弘安の役では嵐によって、肥前鷹島に集結していた敵船が沈み、全滅した」(既出)として、「今でもこのように書いている教科書は複数あって、文部科学省の教科書検定を堂々と通過している。検定を通過する理由は、辞書や一般書にも書いてある通説だから、とのことである。

(後略)『蒙古襲来と神風』(ii ページ)とする。

ここでは、現在使用されている小学校、中学校、高等学校の教科書をそれぞれ一冊ずつあげて、その状況を見ていきたい。その際、分析の視点としては野口氏の使用した①題目、②蒙古の国書、③文永の役の顛末、④蒙古軍の戦術及び幕府の対応策、⑤弘安の役とその顛末、⑥第3次日本遠征、⑦その他の特記事項、⑧「蒙古襲来の影響」、を用いることにする。また、氏はここでは題目を取り上げて全八項目で構成しているが、前述の全八項目とは異なっていることに注意したい。なお教科書の記述をそのまま引用する際は「」で示した。

(1) 『小学 社会 6』(平成31年3月検定済、令和5年1月発行、教育出版)

- ① 「元との戦い」
- ② 記述なし。
- ③ 「暴風雨にあうなど、2度とも大きな損害を受けて引き上げました」
- ④ 「御家人たちは、新兵器を使い集団戦法を用いた元軍の攻撃に苦戦しながらも、激しく戦いました」
- ⑤ ③に同じ。
- ⑥ 記述なし。
- ⑦ 『蒙古襲来絵詞』は「元軍との戦い」「元軍の船に乗り移り戦う竹崎季長」と2葉使用、後者については囲み記事で「『蒙古襲来絵詞』は、季長が、戦いの様子や土地をもらうまでの事情をえがかせたものです。手がらを申し出てほうびをもらい、一族に分けあたえることも、武士団を率いる者の大切な仕事でした」
- ⑧ 「元との戦いで、御家人たちは多くの費用を使い、幕府のために命がけで戦いました。しかし、幕府からほうびの土地をもらうことができず、しだいに不満をもつようになりました。こうして、幕府と御家人との関係がくずれ、幕府の力はおとろえていきました」

(2) 『社会科 中学生の歴史』(令和2年3月検定済、令和5年1月発行、帝国書院)

- ① 「海を越えて迫る元軍」
- ② 「元から服属を求める手紙」の一部要約が、欄外に囲み記述としてある。
- ③ 「冬が来ると補給や撤退が難しくなることもあって、元軍は引き揚げました(文永の役)」
- ④ 「元軍の集団戦法と武器などに押され幕府軍は苦戦しましたが」とあり、『蒙古襲来絵詞』から「元軍と戦う武士」の場面を掲載、「発見された武器」の写真があげられ「土を固めて焼いた球状の入れものに、火薬や鉄片を詰めて、敵に向かって投げました」とある。「防塁」の語句は出て来る。
- ⑤ 「元軍は、幕府軍の抵抗や海岸に築かれた防塁にはばまれて上陸できず、激しい暴風雨のために壊滅的な打撃をうけて引き揚げました(弘安の役)」
- ⑥ 「フビライは3度目の遠征を計画しましたが、彼の死により中止となりました」
- ⑦ i) 「地域史」として「北と南を襲ったもう二つの蒙古襲来」の囲み記事があり、「13世紀後半の樺太(サハリン)では、元軍とアイヌの人々の間で、断続的な戦いが続きました」、「南の琉球、あるいは台湾にも元軍が襲来しました」と説明されている。

- ii) 「元寇」という用語について、欄外に「『元寇』とよぶようになったのは江戸時代になってからで、『寇』とは、国外から侵攻してくる敵という意味です」と説明あり。
  - iii) ページを替えて「歴史を探ろう」のテーマのもと、「東アジアに開かれた窓口 博多～防衛と貿易の拠点として発達した国際都市～」がある。
  - ⑧ 「蒙古襲来は、日本の人々に強い恐怖感を植え付けました。その一方で、暴風雨は日本の神々が国を守るために起こしたものと考えられ、日本を『神国』とし、元軍の一員として戦った高麗（朝鮮）よりも日本のことを高く考える思想が強まっていきました（神国思想）」  
「御家人たちの不満」の節が立てられ、「徳政令」と北条氏の専横が説明され「御家人の心はしだいに幕府から離れていきました」とある。
- (3) 『新選日本史B』（平成29年3月検定済、令和4年2月発行、東京書籍）
- ① 「元寇と社会の変貌」
  - ② 「フビライは日本に朝貢を求めてきたが、幕府は返書を送らないと決め、」（後略）
  - ③ 「御家人たちは、元軍の集団戦法に苦戦しながらも、多くの損害をあたえ、そのため元軍は退却した（文永の役）」
  - ④ 「集団戦法」  
「『てつほう』とよばれる火器も用いられた」（欄外の注）  
「異国警固番役を設け、博多湾沿いには石造の防塁を構築するなどして元の襲来に備えた。また、荘園領主にしたがる、御家人でない武士も幕府の指揮下に置いた」とあり、「防塁の跡」という写真をあげている。
  - ⑤ 「南宋を滅ぼしたフビライは、1281（弘安4）年に14万の兵力による2度目の日本遠征軍を送った。しかし、武士たちの奮戦によって上陸は阻止された。さらに海上に停泊している元軍を暴風雨がおそい、元船の大半はしずみ、兵たちの多くが溺死した。これを弘安の役といい、2度の襲来をあわせて元寇という」  
「元軍には、モンゴルに降伏した高麗人や南宋の人が含まれていた。彼らの士気は低く、それが戦闘に大きな影響をあたえた」
  - ⑥ 「フビライは第3回の遠征も計画したが、元の支配に対する中国民衆の反乱や、コーチ（ベトナム）の抵抗があつて、これが実現することはなかった」
  - ⑦ 本章の冒頭には「モンゴル帝国」という節が立てられ、i) モンゴル部族の発展の要因として「彼らの成長の要因の一つは、新たな製鉄技術の獲得にあつた。鉄の生産力の増大は、優秀な武器や蹄鉄をもたらした」（欄外の注）、ii) また日本と南宋の関係において「南宋との私貿易は平安時代末期からさかんに行われた。大量の宋銭が日本にもたらされ、それによって貨幣経済が国内各地に急速に浸透していった」とあり、「南宋から輸入された品は、陶磁器、絹織物、香料、薬品、書籍、銭などだった。香料、薬品は東南アジア原産の品で、南宋を経由して流入していた。日本はアジアの通商圏に組みこまれていたのである」（欄外の注）と説明が付記されている。
  - ⑧ ⑦のii) 参照。ここでは幕府の衰退については述べられていない。

以上、小学校、中学校、高等学校の教科書をそれぞれ1冊ずつあげてきた。これだけで判断するのは万全ではないが、服部氏の危惧は杞憂の感がある。ただ、野口氏の旧稿（「元寇！キミならどうする？」を一見すると、確かに問題ある教科書記述も存在する。二例をあげる。

一つは『新編 新しい歴史教科書』（平成21年4月検定済、自由社）、ここには「2回とも、元軍は、のちに『神風』とよばれた暴風雨におそわれ、退却した」とあり、本文中に「国難」「神風」の文字を掲げている、との指摘がある。

二つ目は『中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』＜新訂版＞（平成17年検定済、帝国書院）、文永の役については「暴風雨もあつて、元軍はすぐに引きあげました」、弘安の役については「激しい暴風雨にあい壊滅的な打撃を受けて、引きあげました」となっているのである。

それを踏まえると、例えば昨今の事例の帝国書院版は『社会科 中学生の歴史—日本の歩みと世界の動き—』は服部氏の危惧に應える形になっていると判断できる。さらには欄外の注で「蒙古の国書」の要旨を挙げ、「元

寇」という用語の説明まで加えられている。さらには「北と南を襲ったもう二つの蒙古襲来」の囲み記事では、最後に「日本と元はこのような政治的な対立とは別に、日宋貿易に引き続いて商人らによる交易が続けられていました」という記述は重要であると考えられる。

## おわりに

2023年11月、皇室ゆかりの美術品などを所蔵する皇居三の丸尚蔵館の建て替えが一部完成し、「皇居三の丸尚蔵館」として新装開館した。ここには小学校から高校まで社会科の教科書でお馴染みの『蒙古襲来絵詞』が収蔵されている。すなわち、蒙古襲来という事件・事象は日本史を学ぶ上において、必須のテーマとなっているのである。

然しながら、その史実については未確定な問題が今なお存在する。蒙古襲来の研究史を紐解くと、近年の研究成果として服部英雄氏は『蒙古襲来』（2014年）、『蒙古襲来と神風』（2017年）を矢継ぎ早に出版、従来のいわゆる「通説」を退けている。

本稿では「文永の役では敵は一日で引き返し、弘安の役では嵐によって、肥前鷹島に集結していた敵船が沈み、全滅した」という箇所について、服部氏はそれが教科書や一般向け図書の記述にまで影響を及ぼしていると述べるのであり、それについての状況を確認しておく。

高橋秀樹氏（文部科学省教科書調査官）は「元寇と蒙古襲来、どう違う？」というコラムにおいて、文永の役箇所の箇所について「かつての教科書では、文永の役は元軍は暴風雨によって引き揚げたとされてきた。最近の教科書では『暴風雨の影響もあって』と、やや含みを持たせた表現をしているものが多い。また暴風雨に全く言及せずに、元軍の意向で引き揚げたと読み取れるものもある」と纏めている。

筆者は昨今の教科書を本稿において確認したが、服部氏の記述は杞憂の感がある。しかし、『新しい歴史教科書』の流れを汲む教科書については今後も注視していく必要がある<sup>5)</sup>。

## 注

<sup>1)</sup> 荻野七三彦『竹崎季長絵詞』の研究史（『蒙古襲来絵詞』＜『日本絵巻大成』第14巻＞所収、中央公論社、1978年）137ページ。なお『竹崎季長絵詞』とは『蒙古襲来絵詞』のことである。

<sup>2)</sup> 石井進『竹崎季長絵詞』の成立（『日本歴史』第273号、1971年）

<sup>3)</sup> これは「グローバル化時代の歴史教科書：国際比較研究」という上海市の華東師範大学歴史学系において開催されたシンポジウム（2010年9月25日）における発表要旨をもとに増補加筆したものである。なおこの要旨は上海辞書出版社の一書に収録される予定であったが、当局の検閲を通過することができず不掲載となったと聞いている。

<sup>4)</sup> 野口周一「元寇！キミならどうする？」183-184ページ。

<sup>5)</sup> 野口周一「元寇！キミならどうする？」203ページ。

## 参考文献

愛宕松男『忽必烈汗』（富山房、1941年）

片倉 穰「モンゴルの膨張とアジアの抵抗」（『アジアのなかの日本史』第IV巻所収、東京大学出版会、1992年）

川添昭二『蒙古襲来研究史論』（雄山閣出版、1977年）

小林一岳『元寇と南北朝の動乱』＜『日本中世の歴史』第4巻＞（吉川弘文館、2009年）

近藤成一『モンゴルの襲来』＜『日本の時代史』第9巻＞（吉川弘文館、2003年）

杉山正明『大モンゴルの世界』（角川書店、1992年）

杉山正明『モンゴル帝国の興亡』下巻（講談社、1996年）

佐伯弘次『モンゴル襲来の衝撃』＜『日本の中世』第9巻＞（中央公論新社、2003年）

関 幸彦『神風の武士道—蒙古合戦の真実—』（吉川弘文館、2001年）

- 高橋秀樹『元寇と蒙古襲来、どう違う？』（『週刊 新発見！日本の歴史』第20号、朝日新聞出版、2013年）
- 中村和之『北からの蒙古襲来』小論—元朝のサハリン侵攻をめぐって—（『史朋』第25号、1992年）
- 野口周一「フリーア及びサッカー美術館訪問記—『蒙古襲来絵詞』参観を中心に—」（『新島学園女子短期大学紀要』第19号、新島学園女子短期大学、2000年）
- 野口周一「東アジア世界のなかの蒙古襲来」（『総合歴史教育』第37号、総合歴史教育研究会、2001年）
- 野口周一「明治期以降歴史教科書における蒙古襲来小考」（『共愛学園前橋国際大学論集』第2集、前橋国際大学、2002年）
- 野口周一「蒙古襲来に関わる挿絵について」（『新島学園女子短期大学紀要』第22号、新島学園女子短期大学、2002年）
- 野口周一「元寇！キミならどうする？—歴史教科書における歴史叙述をめぐって—」（『比較文化学の地平を拓く』所収、日本比較文化学会関東支部、2014年）
- 野口周一「道德教育における人物学習：北条時宗編—道德教育の原理と方法（3）—」（『地域政策研究』第22巻 第3号、高崎経済大学地域政策学会、2020年／『道德教育問題と歴史教育』所収、世音社、2023年）
- 旗田 巍『元寇—蒙古帝国の内部事情—』（中央公論社、1965年）
- 服部英雄『蒙古襲来』（山川出版社、2014年）
- 服部英雄『蒙古襲来と神風—中世の対外戦争の真実—』（中央公論新社、2017年）
- 服部英雄「蒙古襲来の真実—元寇」（『歴史人』第144号、ABCアーク、2022年）
- 山口 修『世界の歴史』第6巻<『宋朝とモンゴル』>（社会思想社、1974年）
- 山口 修『蒙古襲来—元寇の真実の記録—』（桃源社、1964年）
- 渡部昇一『日本史から見た日本人・鎌倉編—「日本型」行動原理の確立—』（祥伝社、1989年）